

一 般 演 題

1. 病院 LAN を用いる画像検査予約システム

田中 寛 笠井 俊文 杉原 正樹
(島根医大・放)

画像検査予約システムの目的は、電話による予約の煩雑さを解消し、予約状況の的確な把握により、患者の行動予定を明確にし、看護支援および患者サービスを向上させることである。この手段として病院のローカル・エリア・ネットワーク (LAN) を用いる。

前記のため、予約システム検討会を組織したが、その経過は、①院内の予約を必要とする全ての検査は病院 LAN 端末を用いて予約する。②医師、ナース、技師、医事課職員およびシステム・エンジニアを構成員とする検討会を設置した。③検討会は、平成元年 3 月 13 日に始まり 42 回の会合を開き平成 2 年 6 月 6 日に終わった。以上である。

下記がまとめである。予約受付側(放射線部門)では、部門単位の画像検査スケジュール、予約台帳の作成、公開する予約枠と部門保留枠との調整が行われる。予約取得側は、予約状況を端末の画面上で確認しながら予約し、患者単位の行動予定表を得る。

2. ^{123}I -IMP による脳血流量測定の実用性

岩宮 孝司 周藤 裕治 堀 郁子
谷川 昇 遠藤 健一 西尾 剛
水川帰一郎 太田 吉雄 (鳥取大・放)
田辺 芳雄 (鳥取日赤病院・放)
日笠 親績 (同・神内)

^{123}I -IMP を用いた持続動脈採血法による局所脳血流量測定を 111 例(脳梗塞 53 例、パーキンソン病 34 例、老年痴呆 7 例、その他 17 例)に施行し、痴呆の有無および日常生活動作 (ADL) と局所脳血流量との関係について検討を行った。痴呆症例では前頭、側頭葉および基底核領域の有意な血流低下を認めた。ADL 低下(要介助)群では、ADL 良好(自立)群に比し全体的に脳血流量が低下しており、広範な脳実質障害が示唆されたが、特に前頭葉、基底核領域に高度の血流低下を認めた。脳血流量の定量的評価は、痴呆および ADL 低下例における病態評価ならびに経過観察に有用と考えられた。

3. 興味ある SPECT 所見を示した Meningioma の 1 例

小野志磨人 森田 浩一 永井 清久
大塚 信昭 友光 達志 柳元 真一
三村 浩朗 福永 仁夫 (川崎医大・核)
西下 創一 (同・放)
鎌田 昌樹 渡辺 明良 鈴木 康夫
石井 鑑二 (同・脳外)

症例は 41 歳、男性。けいれん発作を主訴に来院。入院時には神経学的に異常所見を認めなかった。入院後の X 線 CT および MRI により、右後頭部に著明な造影効果を示す腫瘤を認め、Meningioma と診断された。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HM-PAO の Dynamic 像では腫瘍部は高集積を示しており、Early 像でも同様であった。Delayed 像では同部は低集積へと変化した。 ^{123}I -IMP の Super Early 像では腫瘍部は高集積を示したが、Early 像では低集積へと変化した。また、腫瘍部以外の大脳半球の rCBF は 51~57 ml/min/100 g と高値であった。手術後 12 日目に行われた ^{123}I -IMP では、両側大脳半球の rCBF は 35~43 ml/min/100 g と正常化した。本例のように、腫瘍部での脳血流トレーサの集積は経時的に変化するため、注意が必要と考えられた。

4. SPECT にて興味ある所見を示した亜急性硬化性全脳炎 (SSPE) の 1 例

森田 浩一 小野志磨人 永井 清久
大塚 信昭 友光 達志 柳元 真一
三村 浩朗 福永 仁夫 (川崎医大・核)
八木 信一 水田 俊 守田 哲朗
(同・小児)

脳血流 SPECT にて経過観察が可能であった亜急性硬化性全脳炎 (SSPE) の 1 例を呈示する。症例は、8 歳女児で、発症後早期の脳血流 SPECT にて、後頭葉および小脳半球に脳血流の低下を認めた。この所見は、SSPE の初期病変が病理学的には後頭葉より出現するという報告に一致する。同時期の X 線 CT、MRI では異常所見は指摘できなかった。発症後 4 か月目の脳血流 SPECT では、後頭葉の集積低下は改善したが、左側頭葉に新たな集積低下が認められた。脳血流 SPECT は、早期の